

# 尾瀬ネットワーク通信

2004年8月20日 VOL7. 3(20) NPO 尾瀬自然保護ネットワーク



夏の尾瀬ヶ原 中田代 (撮影・高橋 喬)

## また山小屋3軒が不祥事 ごみ焼却問題、尾瀬への認識欠如

あきれて物が言えないとは、このようなことを指すのであろう。長蔵小屋の身勝手に短絡的な廃棄物不法投棄事件の記憶がまだ鮮明だということに、そうした事件に無関心なのか、それとも不感症なのか、下田代（見晴）の3軒の山小屋が、こともあろうに小型焼却炉を使って汚物、ごみ等を焼却していた問題は、既に「読売新聞」などの報道でご存じであろう。

通称「尾瀬銀座」と呼ばれる同地区には6軒の山小屋があるが、現在の尾瀬を象徴するかなのような存在である。メインストリート?には、色とりどりの花を植え、幟を

たててかき氷やコーヒー、ビールなどを売っている。その利用客へのサービスか、あたかも私有地のように小屋の敷地にテーブルとベンチを置いている小屋も一部ある。

尾瀬でこのような問題が再三発生するのは、山小屋の経営を支えている尾瀬という自然が、国民共有の国立公園、特別天然記念物として格段の規制対象であることへの経営者の認識の欠如が挙げられよう。また、こうした事態が発生した際の環境省の対応も非常に甘く、長蔵小屋事件が国立公園法上はどうなるのか処分も明確にされていない。猛省を促したい。(高橋 喬)

## JATAより助成金

社 日本旅行業協会（JATA）の本年度自然保護活動助成対象にネットワークが選ばれ、80万5,000円を助成していただくことになりました。リーフレット、至佛山調査報告書の作成。事務局用パソコン、プリンター、シカ調査用ビームライト、バッテリー、ナイトスコープの購入に充てます。

社 日本旅行業協会に厚く御礼申し上げます。（高橋）

## 平成16年度第1回

### 尾瀬ヶ原野生シカ調査報告

担当理事：坂本 敏子

◆ 日時 = 平成16年6月19日夜半  
参加者 = 高橋喬・清水博之・長島睦世・深山美子・坂本敏子・尾瀬ネットワークメンバー外参加者4名 計9名

◆ 確認頭数 = 31頭

◆ 確認状況

・使用器具 = ビームライト、バッテリー、GPSコンパス、ナイトスコープ他

・コース = 山ノ鼻～竜宮（片道 4.03 km）

・所要時間 = 4時間（往復）

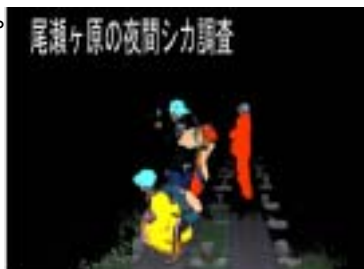
6/19 20:00 尾瀬ロッジ（山ノ鼻）をスタート 24時帰着

・天候 = スタート時晴天。しかし、全体に湿気が多く時折り薄い霧がかかる。復路は雲厚く、闇が濃くなる。

・経過 = 夏至が近く、20:00とはいえ原にはまだ明るさが残る。30分行ったところで残照もすっかり消え猫又川沿いの拋水林で、初めて1頭を確認。これを皮切りに、牛首周辺・源五郎堀・セン沢周辺で次々に、親子・オスを含む群が確認された。シカの動きは活発で、走ったり、はねたりする。

◆ 総括

今回は会員以外の4名の参加者があったとは言え、初めての



尾瀬ネット単独での調査となった。尾瀬高校の学生の目を借りずに、果たしてどの程度の確認が出来るか不安があったが、それはたちまち払拭された。

31頭という確認数は平成13年に調査を開始してから2番目の記録である。新月ということもあるが、ビームライト一式が新しくなったこと、ナイトスコープが新兵器として加わったことが、なにより大きな要因だろう。購入後の数週間、夜間自宅の周辺で何度も操作の練習をしたという。

今後の課題としては、それぞれの器具類の操作の交替がスムーズに出来ること。距離の目測がより正確に出来ることなどが上げられる。

今回購入した器材についても、保管及びバッテリーの充電を再び山の鼻ビジターセンターに依頼した。快く引き受けて頂き大変感謝しております。

## 尾瀬初入山の樹徳高校生

### から感想文

樹徳高校（桐生市錦町1-1-20）理科部の生徒7人は、同部顧問の広井勉教諭、角田靖典教諭とともに、夏休みを利用して7月28～29日に初めて尾瀬に入り、山の鼻に一泊して東面登山道から至仏山に登頂した。現地コーディネーターとしてネットワークから田中志朗指導員が参加した。参加した生徒から届いた感想文を紹介する。（編集部）

## 尾瀬にて

鹿沼 貴志

今回私は、初めて尾瀬へ行きました。テレビなどで見る機会はよくありましたが、自分で行くのは初めてでした。

1日目はまず鳩待峠から山の鼻まで植物を見ながら行きました。天気も悪くならなくとても良かったです。そして尾瀬ヶ原を見ました。私が思っていた以上に花がたくさんあり心に残る風景でした。そして夜、星空の美しさに感動しました。8時半頃には月影で霧がとともきれいで星との同調に心を打たれました。そして真夜中の星はまるで闇の中で無数のロウソクの火を灯したようにきれいに見えました。ずっと見ても新鮮な気持ちでい

られるくらい印象深いものでした。また流れ星やホタルなどその夜は素適なものをたくさん見ることができました。

2日目は至仏山に登りました。至仏山に登ってみると自分が山を甘くみていたことを実感しました。至仏山の山道は想像と違いゴツゴツしていて登りにくく、山登りというよりも岩登りをしているようで登りたくなるほど大変でした。しかし標高が2000mくらいのところで休んでいると、一瞬雲が流れて今まで見えなかった尾瀬ヶ原を見ることができました。

その時はとても登って良かったと思いました。今までの苦労がこの景色を見るためにあるのだと思いました。

この2日間では花や星、ホタル、美しい景色など、これまで見ていたものが何だったのかと思わせるくらい美しいものでした。今回の尾瀬は苦労がたくさんありました。しかし尾瀬の広大な自然が心に残りました。そして人には足があり、たくさんの自然に触れることのできる喜びを覚えました。また自然、特に植物は人と違って自由に動けないけれどその環境で一生懸命生きていることに接することができてよかったです。たった2日間でしたがよい体験ができ人間としても成長ができたと思います。



至仏山頂の樹徳高校生と先生  
最前列左は尾瀬NW田中指導員

## 自然に触れて

戸塚 隆夫

今回、自分が尾瀬へ行って、最も強く感じたことは自然は広大であるということでした。

現在の日本の都市部では、自然は衰退し、縮小しています。「人間があり自然がある」という考えが少なからず定着してしまっていた自分の考えが「自然があり人間がある」という考えに改められました。

次に強く感じられたことは、生命の順応力は偉大であるということです。強い風でも倒れないように平地のとは違い、低く地面に沿う様に生えているマツ科の植物。あまり肥沃でない土地で生きていくため、土壌の養分だ

けではなく、昆虫を捕えて不足している養分を補うモウセンゴケ科の植物。その偉大な順応力から生きる事に対する執念さえ感じられました。

近年の不景気の影響で、自ら命を絶つ人が急激に増加してきています。そういう人たちにこそ、この尾瀬の自然を見て、生きるという行為について、再考してもらいたいと感じました。

(次号にも掲載予定)

## 世界遺産・東南ア最高峰

### キナバル山登頂報告

高橋 喬

10:00 ころコタ・キナバルから乗ってきた大型バンで管理事務所を出発、いよいよ登山ゲート(1866m)に向う。

なお、管理事務所でお昼の弁当を貰ったが、サンドイッチ2枚、ビスケット2個、トリももの唐揚げ、リンゴ1個、それにミネラルウォーター(500ml)が入っていた。途中でリンゴをかじったが、予想に反して実がしまっていて美味な「国光」のようなリンゴだった。南国マレーシアでもリンゴを栽培しているのだろうか。輸入品?

登山ゲートの先にチェックポイントがあり、ここで係員が1人ずつIDパスを確認する。ここからキナバル山の主峰「ロウズ・ピーク」までは、距離にして9km、実質標高差は2200mで、距離に対してこれだけ標高差のある山は日本にはないようだ。

歩き始めは比較的平坦な熱帯雨林をぬうコースで、これなら何とかなるかも、とほくそ笑んだのも束の間、間もなく急登の連続になった。

登山道のかたわらに、食虫植物のウツボカズラがあった。ウツボカズラは数種類あり、最も小さいもので径3cm、長さ5cmほど、最大のもので径10cm、長さ25cmくらい。中をのぞいてみると、ワインのような液体(消化液?)の中に虫が浮いていた。

登山道の周囲の樹木はフタバガキ科の植物が多く、樹上にランやシダ類がたくさん着生していたが、季節はずれとかでランの花は見られなかった。世界一大きいといわれるジフレシアも残念ながら見られなかった。ただし、赤いシャクナゲの花はたくさんあった。日本のシャクナゲとは違って、樹高が高く、地上

から数m~10mといった高いところに咲いていた。登山道のほぼ500mごとに「サミット・トレイル」の里程標が、そして1kmごとに現在地を示すルートマップが建っている。また、ほぼ500mの間隔で「シュルター」と呼ばれる四阿（あずまや）のような休憩所と水洗トイレ、水のみ場があった。

水は沢からパイプでひいてタンクに流し込んでおり、「Untreated Water」（未処理の水）と書いてあったのでわれわれは飲まなかったが、ガイドやポーター、マレーシアの登山客は飲んでいた。

3kmを過ぎるあたりから、キナバル山塊が見え隠れしてくる。やはりそのスケールの大きさに圧倒される。

集団宿泊施設に近づいた頃、女性のボッカさん（ポーター）とすれちがったが、小屋に食料を運んでいるようだった。ガイドに聞くと、ヘリコプターは一切使わないそうだ。山小屋の近くに小さなヘリポートがあったが、これはあくまで緊急用で、やはり環境保護とポーターの職（仕事）を奪わないために、州政府が配慮しているようだった。

どこかの国立公園のように、2軒の山小屋の食料やみやげ物の運搬と、公衆トイレの汚泥処理のためにヘリポートを設けるという考え方と比べたら大きな違いだ。

登山ゲートと6km離れた集団宿泊施設の中間あたりに、サバ州が新しいレストハウスを建設中だったが、砂やセメント、木材などもヘリでは運ばず、すべて人力で運搬していた。

そうこうしているうち、登山道は徐々に土から岩石の道に変わってくるが、ところどころはしごや階段状になっているし、道の脇（特に谷側）には木の柵が整備されているので、危険な感じはなかった。

3000mあたりになると、熱帯とはいえやはり森林限界なのか、空が開けてきて木の高さが低くなり、熱帯雨林を抜けつつあるなど、実感している

と、突然、視界が開け、前方にキナバル山塊のうち、美しい双耳峰の「ドンキー・イヤーズ・ピーク」



「ドンキー・イヤーズ・ピーク」(4054m)が現れた。

キナバル山塊には17のピークがあるが、うち3900m超は3峰、4000m超は9峰あり、われわれも含め一般に「キナバル山に登る」と言えば、最高峰の「ロウズ・ピーク」(4095m)に登ることを指す。

登山ゲートから約6km、標高差約1450mを7時間近くかかって、標高3300m地点に点在する集団宿泊施設に到着。ここには、われわれが泊ったグンティン・ラガダン小屋を含めて4軒の山小屋があり、宿泊の手続きから部屋割り、管理までの一切をラバン・ラタ・レストハウスで行い、食事ができるのもここだけ。食事時間になると、われわれなど他の3軒の小屋の宿泊者も、ここにやってくる。したがって、残飯などはここからしか出ない。  
(次号へ続く)

## 特別催行のご案内

### 群馬側：尾瀬高校見学会

日時・9月24日(金)14時

集合場所・尾瀬高校校門前

申込み期限・9月10日まで

申込み先・坂本敏子

### 福島側：只見川源流域研修会

日時・9月18日(土)~20日(月・祝)

集合場所・JR只見線只見駅17;00

参加費・2万5000円(現地まで交通費は各自)

申込み期限・8月31日まで

申込み先・磯部義孝

尾瀬自然保護ネットワークとは、既に解散した尾瀬の自然を守る会の自然保護指導員の有志が1977年3月に設立した「尾瀬の自然保護活動を実践」している民間のボランティア団体です。2003年9月4日にNPOとなり改称されました。

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

〒100-001

東京都千代田区永田町2-17-5-203(株)SEC内

電話 03-3851-0321/FAX 03-3581-2178

<http://homepage.mac.com/ozenet/>

理事長 高橋 喬

事務局長 椎名 宏子

編集担当 若松 真・島上 健